

DC

L20 ANSWER 39 OF 44 CA COPYRIGHT 2001 ACS

Accession Number

104:10611 CA Full Text

Title

Sustained-release, topical compositions containing polyoxyethylene castor oil ether and sorbitan esters as dispersion bases

Inventor

Kojima, Nobuo; Yoshikawa, Masaru; Yanagibashi, Norio; Abe, Miyuki; Fukuda, Hidenori; Toda, Haruhiko

Patent Assignee/Corporate Source

Lion Corp., Japan

Source

Japan Kokai Tokkyo Koho, 10 pp. CODEN: JKXXAF

Language

Japanese

Patent Information

PATENT NO.	KIND	DATE	APPLICATION NO.	DATE
JP 60149531	A2	19850807	JP 1984-5643	19840118
JP 04055165	B4	19920902		

Abstract

Sustained-release, topical compns. for skin or mucosa application consist of cationic surfactants and active ingredients with addition of 100 parts polyoxyethylene castor oil ether and(or) polyoxyethylene hardened castor oil ether and 3-30 parts sorbitan polyesters as dispersing bases. Thus, a topical pharmaceutical was prepared containing polyoxyethylene hardened castor oil 9, sorbitan trioleate [26266-58-0] 1, benzethonium chloride [121-54-0] 0.2, dibucaine-HCl [61-12-1] 0.1, naphazoline-HCl [550-99-2] 0.1, chlorpheniramine maleate [113-92-8] 0.2, allantoin [97-59-6] 0.1 and EtOH 10 g with addition of H2O to 100 mL.

⑨ 日本国特許庁 (JP) ⑩ 特許出願公開
 ⑪ 公開特許公報 (A) 昭60-149531

⑫ Int. Cl. 4
 A 61 K 47/00 識別記号 庁内整理番号 ⑬ 公開 昭和60年(1985)8月7日
 7/00
 9/00 6742-4C
 7306-4C
 6742-4C 審査請求 未請求 発明の数 1 (全10頁)

⑭ 発明の名称 持続性局所用剤組成物

⑮ 特 願 昭59-5643
 ⑯ 出 願 昭59(1984)1月18日

⑰ 発明者 小島 信雄 東京都杉並区阿佐谷南1-37-3
 ⑰ 発明者 吉川 勝 東京都杉並区上井草1-26-12
 ⑰ 発明者 柳橋 憲夫 東京都杉並区上井草1-26-12
 ⑰ 発明者 阿部 深雪 市川市国分5-12-22
 ⑰ 発明者 福田 英憲 南足柄市塚原2558-7
 ⑰ 発明者 戸田 晴彦 千葉市真砂2-15-1-118
 ⑰ 出願人 ライオン株式会社 東京都墨田区本所1丁目3番7号
 ⑰ 代理人 弁理士 阿形 明

明細書

1. 発明の名称 持続性局所用剤組成物

2. 特許請求の範囲

1. (1) 陽イオン性界面活性剤 0.005~0.5重量%、(2) 薬効成分の有効量及び(3)、(A) ポリオキシエチレンヒマシ油エーテル及びポリオキシエチレン硬化ヒマシ油エーテルの中から選ばれた少なくとも 1 種のエトキシレートと、(B) このエトキシレート 100 重量部当たり 3~30 重量部の長鎖脂肪酸のソルビタンポリエステルのベシクル分散液とから成る持続性局所用剤組成物。

2. (A) 成分がエチレンオキシド平均付加モル数 7~20 のエトキシレートである特許請求の範囲第 1 項の記載の持続性局所用剤組成物。

3. (B) 成分が炭素数 16~18 の長鎖脂肪酸のソルビタンポリエステルである特許請求の範囲第 1 項記載の持続性局所用剤組成物。

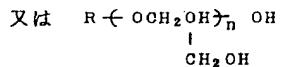
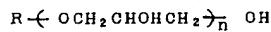
3. 発明の詳細な説明

本発明は、薬効成分の皮膚、粘膜等に対する吸着性を増大させ、滞留性を向上させることにより徐放性を付与して、長期間にわたって薬効を持続させるようにした局所用剤組成物に関するものである。さらに詳しくいえば、本発明は、特定のベシクルを陽イオン性界面活性剤とともに、薬効成分を含む水性媒質中に配合し、薬効成分の皮膚、粘膜等に対する吸着性を増大させた持続性局所用剤組成物に関するものである。

従来、両親媒性物質が水中においてベシクルすなわち小胞体を形成することが知られており、例えば天然物中にもリン脂質によるリボゾーム、不飽和脂肪酸によるウファソームなどのベシクルが存在している。この種のベシクルは、安定な分散液であるため、化粧料、医薬品などへの応用が図られているが、前記した天然に存在するベシクルは、安全性の点では問題ないとしても価格が高いため、大量消費用としては不適当であつた。

特開昭60-149531(2)

しかしに、最近に至り、非イオン性界面活性剤を用いたベシクルすなわちニオゾームが見出され、容易に入手可能な原料によるベシクル分散液の形成、例えば一般式



(式中のRは炭素数12~30の脂肪族炭化水素基、nは1~6の整数)

で示される非イオン性界面活性剤によるベシクルの形成（特開昭52-6375号公報）、グリセリンジアルキルエーテルの酸化エチレン付加物及びミリスチン酸ステアリルアミドの酸化エチレン付加物によるベシクルの形成（「J. Colloid Interface Sci.」、第82巻、第2号、第401～417ページ）などが報告されている。

他方、ポリオキシエチレン硬化ビマシ油エーテルやポリオキシエチレンソルビトールテトラオレ

ートがコンセントリックラメラ液晶を形成することは知られている(「日本化学雑誌」、1981年、第11号、第1691~1696ページ)。

ところで、ベンクルはコンセントリックラメラ液晶の特殊な形態ということができ、その相違点は界面活性剤が2分子膜若しくは多重膜を形成し、その内部に実質的な親水性の空洞を形成し、水又は水溶液を含有する点にある。したがつて、このベンクルを形成するためには、界面活性剤分子がベンクルを形成しやすい曲率を有するラメラ2分子膜をつくるように配向することが必要である。しかしながら、前記のポリオキシエチレン硬化ヒマシ油エーテルはコンセントリックラメラ液晶を形成するものの、よく知られているように酸化エチレン付加モル数の異なる複数の化合物の混合物であるため、それが形成するコンセントリック液晶の状態は一様でなく、はつきりしたベンクル構造はみられない。

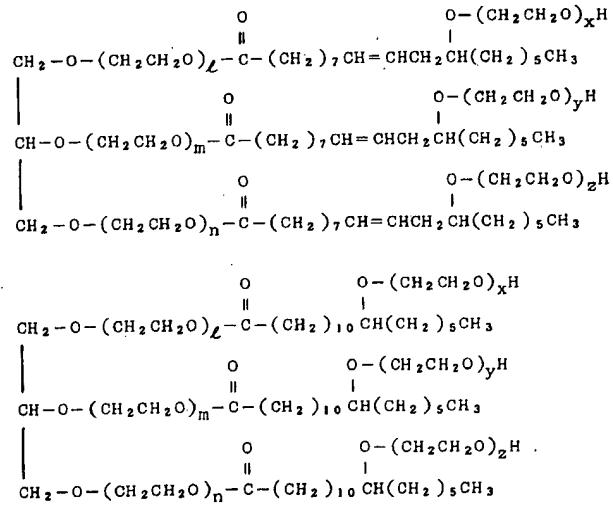
本発明者らは、公的機関により食品や化粧品などに使用が認められ、かつ容易に入手しうる界面

活性剤を用いたペシクル分散液を開発するために、種々研究を行い、先に界面活性剤として、非イオン性のポリオキシエチレンヒマシ油エーテルやポリオキシエチレン硬化ヒマシ油エーテルを用い、これに長鎖脂肪酸のソルビタンポリエステルを、所定の割合で添加することにより、該界面活性剤がペシクルを形成しやすい曲率で配向して容易にペシクルが形成されることを見出したが、さらにこのペシクルの実用化を図るために研究を続けた結果、このペシクルは陽イオン界面活性剤の共存下において、皮膚や粘膜への吸着性が増大し、したがつてこれを局所用剤に配合すれば滞留性の高い徐放性を有するものとしうることを見出し、この知見に基づいて本発明をなすに至つた。

すなわち、本発明は、(1)陽イオン性界面活性剤0.005～0.5重量%、(2)堿効成分の有効量、(3)(A)ポリオキシエチレンヒマシ油エーテル及びポリオキシエチレン硬化ヒマシ油エーテルの中から選ばれた少なくとも1種のエトキシレートと、(B)このエトキシレート100重量部当り3～30重量部の

長鎖脂肪酸のソルビタンポリエステルのペシクル分散液とから成る持続性局所用剤組成物を提供するものである。

本発明組成物の(a)成分として用いられるエトキシレートは、ポリオキシエチレンヒマシ油エーテル又はポリオキシエチレン硬化ヒマシ油エーテルであるが、これらは、一般式



液晶は形成されるものの、電子顕微鏡観察によるとベシクルの形成は認められない。

しかしながら、少量の(B)成分を添加すると、界面活性剤がベシクルを形成しやすい曲率で配向してベシクルが形成される。(A)成分と(B)成分との割合が前記の範囲内であると、使用した界面活性剤の形成する会合体のほとんど全部がベシクルを形成する。またベシクルの安定性及び担持させた種々の薬効成分の保持力などを考慮して好ましい範囲が選択される。また、(A)成分と(B)成分の含有量は組成物全量に対して0.1~50重量%の範囲が望ましく、さらに1~35重量%の範囲が好適である。

これらのエトキシレートは単独で用いてもよいし、また2種以上混合して用いてもよく、そのエチレンオキシド平均付加モル数(前記の式において $\eta + m + n + x + y + z$ である)は7~20、特に8~15の範囲が好適である。

本発明のベンクル分散液において(B)成分として用いる長鎖脂肪酸のソルビタンポリエステルについては、その長鎖脂肪酸残基の炭素数が14~18のもの、特に16~18のものが好ましい。またそのエステル化度は2.5~3.5の範囲、特に2.8~3.2の範囲が好適である。このようなものとしては、例えばソルビタントリバーミテート、ソルビタントリオレート、ソルビタン牛脂脂肪酸トリエステルなどを挙げることができる。

本発明組成物における(A)成分と(B)成分との割合は、(A)成分100重量部当り(B)成分3~30重量部の範囲にすることが必要であり、好ましくは100:5ないし100:25の範囲である。

(A)成分単独の場合は、コンセントリックラメラ

らの塩、ジバルミチルアミン、ジステアリルアミン、ジ硬化牛脂アルキルアミンなどの炭素数14~22のジ長鎖アルキルアミン及びこれらの塩、バルミチルトリメチルアンモニウム塩、ステアリルトリメチルアンモニウム塩、オレイルトリメチルアンモニウム塩、硬化牛脂アルキルトリメチルアンモニウム塩などのモノ長鎖アルキルトリ短鎖アルキル型第四級アンモニウム塩、ジステアリルジメチルアンモニウム塩、ジ硬化牛脂アルキルジメチルアンモニウム塩などの炭素数14~22のアルキル基を2個有するジアルキル型第四級アンモニウム塩、ビスヒドロキシエチルステアリルアミン、ビスヒドロキシエチル硬化牛脂アルキルアミン、ボリオキシエチレンステアリルアミンなどの炭素数14~22の長鎖アルキルアミンの酸化アルキレン付加物及びその塩、ステアリン酸とヒドロキシエチルエチレンジアミンとの脱水環化生成物の四級化物などの炭素数14~22のアルキル基を有する2-アルキル置換イミダゾリニウム塩などが挙げられる。

また、本発明組成物に含ませることができる薬効成分は、通常の局所用剤の薬効成分として慣用されているものであれば何でもよく、特に制限はない。このような薬効成分としては、例えば以下に示すようなものが用いられる。

(1) 殺菌消毒剤

塩化ベンザルコニウム、塩化ベンゼトニウム、塩化セチルビリジニウム、クロルヘキシジン、グルコン酸クロルヘキシジン、バルミチルトリメチルアンモニウムクロリド、チモール、塩化デカニウム、チメロサール、マーキュロクロム、プロテイン銀、クロラミン、次亜塩素酸ナトリウム、塩素酸カリウム、ヨウ素、ヨウ化ナトリウム、ヨードチンキ、ポビドンヨード、ヨードホルム、オキシドール、過マンガン酸カリウム、過ホウ酸ナトリウム、エタノール、イソプロバノール、フェノール、クレゾール、ビチオノール、アクリノール、塩化メチルロザニリン、ニトロフラゾン、レゾルシン、臭化ドミフェン、テゴー51、ビオゾール、クロロブタノール、サリチル酸、ヘキサクロロフ

エン、ベンジルアルコール、安息香酸、クレオント、アクリフラビン、サリチル酸フェニル、ノーラウロイルサルコシンナトリウム、塩化ペルベリン、硫酸ペルベリン。

(2) サルファ剤

ホモスルファミン、スルファミン、スルフィンキサゾール、スルフィソキサゾールナトリウム、スルファメトキサゾール、スルフィソミジン、スルファジアジン、スルフィソミジンナトリウム、スルファメトキサゾールナトリウム。

(3) 局所麻酔剤

塩酸ジブカイン、塩酸プロカイン、塩酸ヘキソカイン、ベンジルアルコール、アミノ安息香酸エチル、ベンゾカイン、塩酸テトラカイン、塩酸テーカイン、リドカイン、塩酸リドカイン、塩酸メビバカイン、塩酸ブビルカイン、塩酸コカイン、塩酸カタカイン、塩酸プロピトカイン、塩酸ブタニカイン、塩酸オキシブタニカイン、塩酸メブリルブタニカイン、塩酸ビペロカイン、クロロブタノール、塩酸メブリルカイン、塩酸エビロカ

イン、テーカイン。

(4) 止血剤、血管収縮剤

硝酸ナファゾリン、塩酸フェニレクリン、塩酸ナファゾリン、塩酸テトラハイドロゾリン、塩酸オキシメタゾリン、塩酸トラマゾリン、エビネフィリン、トロンビン、グルコン酸カルシウム、塩化カルシウム、アスパラギン酸カルシウム、サイクロナミン、塩化第二鉄、α-アミノカプロン酸、トラネキサム酸、カルバゾクロム、カルバゾクロムスルホン酸ナトリウム、アドレノクロムモノアミノグアニジンメタンスルホン酸ナトリウム、ルチン、ヘスペリジン、メチルエフェドリン、塩酸メチルエフェドリン、ヒノキチオール、エビジヒドロコレステリン。

(5) 抗ヒスタミン剤、抗アレルギー剤

クロタミン、塩酸トンジルアミン、塩酸ジフェンヒドラミン、塩酸メトジラジン、塩酸プロメタジン、サリチル酸ジフェンヒドラミン、タンニン酸ジフェンヒドラミン、クロルフェニラミン、マレイン酸クロルフェニラミン、テシットデシチ

ン、塩酸イソチベンジル、ジフェンヒドラミン、塩酸イプロヘブチン、ジフェニルイミダゾール。

(6) 鎮咳きよ痰剤、ぜんそく治療剤

塩酸メチルエフェドリン、塩酸エフェドリン、ノスカビン、リン酸コデイン、デキストロメトルファン、オキソラミン、チベビジン、メチルエフェドリン、イソプロテレノール、クロロブレナリソ、サルブタモール、トリメトキノール、ババベリン、アミノフィリン、ベンプロベリン、アボモルヒネ、エメチン、ビロカルビン、チステイン、テレビン油、ユーカリ油、グアヤコール。

(7) ビタミン類

レシチン、ニコチン酸アミド、エルゴカルシフェロール、カルシフェロール、トコフェロール、酢酸トコフェロール、イクタモール、酢酸レチノール、バルミチン酸レチノール、バントテニルエチルエーテル、酢酸リボフラビン、チアミン油、ジカブリル酸ビリドキシン、アスコルビン酸、塩酸ビリドキシン、リボフラビン、バントテン酸カルシウム、シアノコバラミン、ビタミンA、バン

テノール、水溶性ビタミンA、デキスパンテノール、フラビンアデニンジヌクレオチド。

(8) ホルモン剤

安息香酸エストラジオール、ヘキセストロール、メチルテストステロン、プロピオニ酸テストステロン。

(9) 細胞賦活剤

アズレン、水溶性アズレン、クロロフイリン、コンドロイチン硫酸ナトリウム、尿素、アミノエチルスルホン酸、アラントイン、ルーアスパラギン酸カリウム、ルーアスパラギン酸マグネシウムカリウム、クロロフィル、銅クロロフィンナトリウム、グアレナートナトリウム、グアヤコールスルホン酸カリウム。

(10) 抗生物質

クロラムフェニコール、塩酸デメチルクロルテトラサイクリン、硫酸フラジオマイシン、トリコマイシン、クロトリマゾール、バシトラシン、硫酸コリスチン、コリスチンメタンスルホン酸ナトリウム、ラクトビオエリスロマイシン。

(1) 非ステロイド系消炎剤

グリチルレチン酸、フルフエナム酸、メフエナム酸、インドメタシン、サリチル酸メチル、サリチル酸グリコール、グリチルリチン酸ジカリウム、グリテール、フェニルブタゾン。

(2) ステロイド剤

ヒドロコルチゾン、デキサメサゾン、ベタメサゾン、ブレドニゾロン、メチルブレドニゾロン、酢酸ヒドロコルチゾン、酢酸デキサメサゾン、ベタメサゾンワレート、トリアムシノロンアセトニド、フルオロメドロン、ベタメサゾン。

(3) 生薬・漢方薬

ローズマリーエキス、エンゴサク、ホウオウエキス、シンジュエキス、カンゾウエキス、コハクエキス、ショウマエキス、ニンジンエキス、キキヨウエキス、カミツレチンキ、マオウエキス、トコンエキス、オウレンエキス、ギキヨウ根エキス、ベニバナエキス、アロエエキス、ラタニアチンキ、ミルラ油エキス、チヨウジ油、桂皮油、オウバクエキス、イヌザンショウエキス、トウキエキス、

シヤクヤクエキス、トウガラシエキス、トウガラシチンキ、アルニカエキス、ペラドンナエキス、コウカエキス、ロートエキス、モクキンビチソウキ、ヒノキチオール、サンシン浸出液、ソウジユツチソウキ、シコンエキス、ユーカリ油、サンフロン末エキス、ニクズクエキス、ダイオウエキス、前記エキス、テンキ剤で使用される植物のオレオレジン。

(4) 寄生性皮膚疾患治療剤

塩酸ジマゾール、チアントール、ナイスタチン、ハロプロジン、ウンデシレン酸、フェニルヨードウンデシノエート、酢酸ビスデカリウム、トルナフタート、グリセオフルビン、ビロニトリル、シツカニン。

(5) 酵素製剤

デキストラナーゼ、塩化リゾチーム、アミラーゼ、リバーゼ、プロテアーゼ。

(6) 局所刺激剤

カンフル、d-ボルネオール、カフエイン、メントール、タンニン酸、イクタモール、ノニル酸

ワニリルアミド。

(1) 消化性かいよう治療剤

メチルメチオニンスルホニウムクロリド、塩酸ビペタナート、レーグルタミン、ヨウ化イソプロバミド、塩酸ヒスチジン、オキセザゼイン、スルビリド、ウロガストロン、スクラルファート、アルジオキサ、ゲルファナート、グリチルリチン、グアレネートナトリウム、塩酸クロルベンゾキサン、臭化ベンチエネット、臭化グリコビロニウム。

(2) 副交感神経作用剤

メチル硫酸ネオステグミン。

(3) 養毛剤

塩化カプロニウム。

これらの薬効成分は、単独で用いてもよいし、また必要に応じ2種以上組み合わせて用いてよい。

なお、前記した陽イオン性界面活性剤として、塩化ベンザルコニウム、塩化ベンゼトニウム、塩化セチルピリジニウムのような、それ自体薬効成

分となりうるものを使用した場合には、特に他の薬効成分を加えずに所望の塗布剤組成物とすることもできる。

これらの薬効成分の配合量は適応部位、適応症状によつて変わるが、通常は組成物全量に基づき0.001~6.0重量%の範囲内で選ばれる。

本発明組成物を調製する方法については特に制限はなく、例えば、(A)成分、(B)成分、(C)成分すなわち陽イオン性界面活性剤及び(D)成分すなわち薬効成分との混合物中へ水を加えて混合させる方法。前記(A)、(B)、(C)及び(D)成分の混合物を水へ加えて混合させる方法。あらかじめ(D)成分を溶解させた水溶液を、(A)成分、(B)成分及び(C)成分の混合物へ加えて混合させる方法。あるいはあらかじめ(A)成分と(D)成分を混合した混合物中に、(C)成分と(D)成分とを溶解させた水溶液を加えて混合する方法などで行うことができる。また、これら以外の添加順序に従つて調製することもできる。

このようにして得られたベンケル分散液は、所望に応じ任意の濃度に希釈して使用に供すること

もできる。

本発明組成物は、使用した界面活性剤によつて形成される会合体の実質的な全量がベシクルを形成し、かつ長期間の安定性を有しており、また安価で安全性があり、かつ容易に入手しうる界面活性剤物質を使用しているので、実用性が極めて高いという利点を有している。

さらに、本発明組成物は次に示すような特徴を有しているので、外用殺菌消毒剤、化膿性疾患治療剤、外用鎮痛剤、鎮痒剤、収れん剤、消炎剤、皮膚病治療剤、皮膚軟化剤、毛髪用剤、歯科口腔処置剤、鼻腔咽頭塗布剤、点眼剤、消化器管系処理剤などとして好適である。

(1) 薬効成分がベシクル内部(水相)又は膜内に、あるいはその両方に保持され安定化している。

(2) ベシクルを構成する膜が細胞膜類似の構造を有するため、生体膜との相互作用が強くて生体組織に対する吸着性に優れ、生体表面に比較的長時間滞留することもでき、ベシクル内部あるいは膜内に組込まれた有効成分の生体内への吸収性も良

好である。

(3) ベシクルが陽イオン化されているため、血液、体液、水などでぬれていますの部位やそれらが流動している部位においても、吸着、滞留性が高く、また水洗などによつても簡単に離脱する事がない。

(4) ベシクルはエマルジョン(マイクロエマルジョン、多相エマルジョンを含む)に比較して安定性がよく、希薄溶液でも安定に存在する。

なお、ベシクルは基本的には電子顕微鏡による観察(視覚判定、写真など)によつて確認されるが、偏光顕微鏡下での十字ニコルの有無により、ある程度の推測ができる。

次に実施例によつて本発明をさらに詳細に説明する。

実施例 1

ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油(エチレンオキシド平均付加モル数10)99とソルビタントリオレート1%と塩化ベンゼトニウム0.2%を混合し、さらに薬効成分として塩酸ナフアゾリン0.1%、塩酸ジブカイン0.1%、マレイン酸クロ

ルフェニラミン0.2%及びアラントイン0.1%を加え、エタノール10%と水を加えて全量を100mlとすることにより、外用塗布剤組成物を調製した。

このようにして得た組成物を水で50倍に希釈し、その8.0mlを試験管に採り、この中へケラチンパウダー0.1%を加え、2分間振りませたのち3000 rpmで5分間遠心分離し、上澄液について薬効成分の含有量を測定した。

次に残留したケラチンパウダー層に水道水8mlを加え、2分間かきませたのち、再び遠心分離し、得られた上澄液中の薬効成分の含有量を測定した。このようにして水洗、遠心分離を3回繰り返したのち、各回ごとに各上澄液中の各薬効成分量からケラチンパウダーに対する吸着滞留量を算出した。

他方、対照として、塩化ベンゼトニウム0.2%、塩酸ナフアゾリン0.1%、塩酸ジブカイン0.1%、マレイン酸クロルフェニラミン0.2%、アラントイン0.1%及びエタノール10%とを混合し、これを水で100mlまで希釈した溶液を調製し、上記

と同様にしてケラチンパウダーに対する各薬効成分の吸着滞留量を算出した。

このようにして得た試料中の各薬効成分の吸着滞留量を対照における吸着滞留量と各回ごとに比較した結果を第1表に示す。

第 1 表

薬効成分	吸着性(対照に対する倍数)			
	洗浄0回	洗浄1回	洗浄2回	洗浄3回
塩酸ナフアゾリン	2	2.5	3	3
塩酸ジブカイン	2	2.5	3	3
マレイン酸クロルフェニラミン	2	2.5	3	3
アラントイン	3	3.3	4	5

この表から明らかのように、本発明組成物は皮膚に対する吸着性、滞留性が高い。

実施例 2

ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油(エチレンオキシド平均付加モル数10)99とソルビタントリオレート1%と塩化セチルピリジニウム0.2%

第2表

試料	ラット数(匹)	引張強度(g/cm)
対照	10	466±60.5
本発明組成物	10	570±83.3
比較例	10	520±82.8

を混合し、これに薬効成分として塩酸ジフェンヒドラミン0.5g、塩酸リドカイン0.1g及びアロエエキス1.0gを加え、全量が100mlになるまで水で希釈することにより、外用塗布剤組成物を調製した。

体重150g前後のウイスター系雄ラット10匹の背部皮膚に長さ4cmの切傷をつくりミニツヘル鉗子で傷口を閉塞した後、上記の塗布剤組成物約2mlを1日2回ずつ7日間連続して施し、その治療効果を試験した。8日目に背部皮膚を剥離し、インストロン引張試験機により、切傷部の引張強度を測定した。

また、比較のために、なんら治療を施さない場合(対照)及び塩化セチルピリジニウム0.2g、塩酸ジフェンヒドラミン0.5g、塩酸リドカイン0.1g及びアロエエキス1.0gのみを含む水溶液を施した場合(比較例)についても同様の試験を行つた。

得られた結果を第2表に示す。

この表から明らかなように薬効成分の適用により、治癒が促進されている。

次に、各試料を塗布した1分後水洗すること以外は前記と全く同様にして、切傷部の引張強度を測定した。その結果を第3表に示す。

第3表

試料	ラット数(匹)	引張強度(g/cm)
対照	10	466±60.5
本発明組成物	10	550±72.3
比較例	10	473±66.0

この表から明らかなように、本発明組成物は、水洗によつても皮膚上への高い滞留性を示しているため、治療効果が比較例よりも優れている。

実施例3

ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油(エチレンオキシド平均付加モル数10)9gとソルビタントリオレエート1gと塩化ベンゼントニウム0.2gとローズマリーエキス1.0gに、少量の香料とサクカリントを加え、さらにエタノール10gと水を加えて全量を100mlとすることにより洗口剤を調製した。

このようにして得た洗口剤を0.1Mリン酸緩衝液(pH9)で40倍に希釈したのち、メチルメルカバタン量の多い4人をパネルとして選んで消臭実験した。すなわち、被験者の口腔内に上記の希釈液40mlを15秒間含ませ吐き出させるプロセスを2回繰り返したのち、水道水でうがいさせ、洗口前と洗口後の口臭の強さを評価者3名によつて官能評価した。この際の評点は次の基準により洗口前の口臭に対しての相対的強度で表わした。

+2	洗口前より口臭が非常に強い
+1	強い
+0.5	やや強い
0	普通
-0.5	やや弱い
-1	弱い
-2	非常に弱い

このようにして得られた結果を口臭の相対強度の経時的变化を示す実線グラフとして添付図面に示す。

なお、比較のために、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油とソルビタントリオレエートとを含まない洗口剤を調製し、これを用いて上記と同様に消臭実験した結果を破線グラフとして併記した。

このグラフから明らかなように本発明組成物は、消臭効果が高く、しかも持続性を有している。

実施例4

100ml容ビーカーに第4表に示すような量の各成分を秤量し、よく混合した。次にこの混合物に第4表に示すような量の水を加え、マグネットック

スターラーで均一になるように十分混合した。試料1及び2からは流動性を有するやや透明感のある乳白状のペシクル分散液を得た。この分散液におけるペシクルの形成は電子顕微鏡により確認し、その粒径はいずれも0.1~5ミクロンの範囲であった。

第4表

成 分 名	試料1	試料2	試料3
フルフェナム酸	0.1%	0.1%	0.1%
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油エーテル($\bar{P} = 10$)	12%	12%	-
ソルビタントリオレート	1.2%	1.2%	-
塩化ベンゼトニウム	0.3%	-	-
エタノール	20%	20%	20%
水	残	残	残
計	100%	100%	100%

このようにして得られた分散液を20倍量の生理食塩水で希釈したもの被験液とし、一方生体表面積のモデルとしてゴールデンハムスタークーネークボーチ部位の粘膜4cm²(表面積)を剥離し、その切片を生理食塩水で洗浄したチークボーチ粘膜を被験液8ml(被験液中のフルフェナム酸量をAmgとする。)に入れ、温度40°Cで5分間振とうする。振とう後の上澄液中のフルフェナム酸量を測定する。(Bmgとする。)

チークボーチ粘膜は生理食塩水4mlを加え40°Cで5分間振とうする操作を5回繰り返す振とう後の3回及び5回洗浄の時の上澄液を測定(Cmg)し下記式によりフルフェナム酸のチークボーチ粘膜への吸着、滞留量を算出した。

チークボーチ粘膜への吸着滞留量 = A - B - C
このようにして得た試料中のフルフェナム酸の吸着、滞留量を対照(試料3)における吸着滞留量と各回ごとに比較した結果を第5表に示す。

第5表

試料名	吸着滞留性(対照に対する倍数)		
	洗浄0回	洗浄3回	洗浄5回
1	5	5	5
2	3	2	1.5

この表から明らかなように試料2のペシクル分散液は試料3(対照)と比較して粘膜に対する吸着性は高く、洗浄により染効成分(フルフェナム酸)が脱離するが、試料1(本発明)は粘膜に対する初期の吸着量も高くさらに洗浄操作によつても高い吸着性を維持(滞留性)している。

次に本発明組成物の処方例を示す。

処方例1 化膿性皮膚疾患治療剤

成 分	含有量(%)
塩化ベンゼトニウム	0.2
スルファメトキサゾール	4
モノエタノールアミン	0.99
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P} = 10$)	9
ソルビタントリオレート	1

硫酸ラジオマイシン

1

エタノール

10

水

全量100mlになるまで

処方例2 外用消炎鎮痛剤

成 分	含有量(%)
レーメントール	2
デーカンフル	2
チモール	0.5
酢酸トコフェロール	0.2
サリチル酸メチル	3
サリチル酸グリコール	1
塩化ベンザルコニウム	0.1
トウガラシエキス	0.25
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P} = 10$)	9
ソルビタントリオレート	1
エタノール	30

処方例3 寄生性皮膚疾患治療剤

全量100mlになるまで

成 分	含有量(%)
クロトリマゾール	1

塩化ベンザルコニウム	0.2
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$)	9
ソルビタントリオレエート	1
エタノール	10
水	全量 100 mlになるまで

処方例 4 毛髪用剤

成 分	含有量(%)
安息香酸エストラジオール	0.001
ヒドロコルチゾン	0.0016
塩化カブロニウム	0.5
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$)	9
ソルビタントリオレエート	1
塩化ベンザルコニウム	0.02
エタノール	10
水	全量 100 mlになるまで

処方例 5 紋菌消毒剤

成 分	含有量(%)
塩化ベンゼトニウム	0.2
塩化リゾチーム	0.5
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$)	9

塩酸ナフアゾリン	0.05
グリチルリチン酸ジカリウム	0.3
塩化リゾチーム	0.5
塩酸プロカイン	0.1
塩化ベンザルコニウム	0.02
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$)	9
ソルビタントリオレエート	1
エタノール	10
水	全量 100 mlになるまで

処方例 8 点眼薬 A

成 分	含有量(%)
塩化ベンザルコニウム	0.01
フラビンアデニンジヌクレオチド	0.02
スルファメトキサゾール	4
モノエタノールアミン	0.99
メチル硫酸ネオスチグミン	0.002
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$)	3
ソルビタントリオレエート	0.3
水	全量 100 mlになるまで

処方例 9 点眼薬 B

ソルビタントリオレエート	1
エタノール	10
水	全量 100 mlになるまで

処方例 6 うがい薬

成 分	含有量(%)
塩化ベンゼトニウム	0.2
グアレナートナトリウム	0.3
ミーメントール	0.6
チモール	0.1
d-ボルネオール	0.1
アスコルビン酸	0.2
マレイン酸クロルフェニラミン	0.2
塩酸メチルエフェドリン	0.2
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$)	9
ソルビタントリオレエート	1
エタノール	10
水	全量 100 mlになるまで

これを水で 20 倍に希釈して使用する。

処方例 7 鼻腔咽頭塗布剤

成 分	含有量(%)
塩化ベンゼトニウム	0.01
フルオロメトロン	0.1
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$)	3
ソルビタントリオレエート	0.3
ホウ酸	1.5
水	全量 100 mlになるまで

処方例 10 点眼薬 C

成 分	含有量(%)
塩化ベンザルコニウム	0.01
ラクトビオン酸エリスロマイシン	0.5
コリスチンメタンスルホン酸ナトリウム	0.5
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$)	3
ソルビタントリオレエート	0.3
水	全量 100 mlになるまで

処方例 11 胃腸薬

成 分	含有量(%)
塩化ベンザルコニウム	0.05
メチルメチオニンスルホニウムクロリド	0.5
グリチルリチン	0.7

硝クロロフインナトリウム 0.1
 ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油($\bar{P}=10$) 9
 ソルビタントリオレエート 1
 水 全量 100 mLになるまで

前述したいずれの処方例においてもペシクル化剤の分離は認められず、良好な安定性を示した。

4. 図面の簡単な説明

図面は本発明による洗口剤と従来の洗口剤との消臭効果を示すグラフである。

特許出願人 ライオン株式会社
 代理 人 阿形明

